

## 趣旨説明 —初年次教育の位置づけは明確か?—

川島啓二  
国立教育政策研究所

本日のテーマは、「初年次教育のリアリティから質保証の意味を考える」です。近年、質保証システムの構築がきわめて重要な課題となっていますが、初年次教育にとっては、このことが一種の悩ましさとなっているように思われます。特に、質保証の中で強調されているのが、内部質保証です。内部質保証には、ディプロマ・ポリシー(DP)、つまりどのような人材を育成するのかをまず策定し、それに合うかたちでカリキュラム・ポリシー(CP)を策定する。そして、さらにCPに合うかたちでアドミッション・ポリシー(AP)を策定するという流れがあり、この三つのポリシーの一貫性を確保することを、学士課程答申は要求しています。

初年次教育(=FYE)は、CPの一つのパーツとして位置づけられています。そのため、今後、内部質保証の流れの中で、どのような初年次教育を構築していくのかということが、各大学にかなり厳密に問われるようになっていくと考えられます。しかし、現状では、初年次教育は学生が大学教育に適応できるようにするための支援であり、1年次に提供する教育プログラムという定義しかありません。それにもかかわらず初年次教育は、その大学のDPに対してどういう位置づけなのかを明確にすることが厳密に要求されているのです。

そもそも、初年次教育はどのような課題意識から生まれてきたのでしょうか。その背景には、初年次の学生が高校までの学びを転換し、大学に適応することをサポートしなければならないという、ユニバーサル化した現在の高等教育が抱えている、ある種の普遍的な課題があったのだと思います。

三つのポリシーの中では、各大学の個性に応じたCPの策定、その中での初年次教育の位置づけということが問題になりますが、そもそもの原点を考えてみると、それとは少し異なるニュアンスがあったのではないかと思います。例えば、ポートフォリオや体験学習、文章表現など、初年次教育が実践してきた方法的工夫は、ある意味では、初年次教育の真骨頂であったわけです。

しかし、今の流れの中ではPDCAの中の、特にPとCが強調される傾向があります。PとCとは、つまり、教育目標を実現するためにどのようにプランを立て、それがどのくらい達成できたのかをチェックすることです。このPとCに比べてD、つまり学習のプロセスというのは、相対的には重視されていないように思われます。

初年次教育がこだわってきたのは、まさにこのDの部分ではないのでしょうか。カリキュラム体系の中におさまりにきらないものを初年次教育でやってきたということを考えてみると、内部質保証の枠組みの中で、今後、初年次教育は一体どのようなアイデンティティを持つべきなのか。このことが今、問われているのではないのでしょうか。このような問題を今回は考えていきたいと考えています。